

「保育内容の指導法（表現）」における ICT を用いた 創造的音楽学習の可能性 —イギリスのインクルーシブ音楽づくりの事例から—

小松原 祥 子

I. 序論

近年、イギリス（本稿ではイングランドを対象とする）では、音楽科ナショナル・カリキュラム（National Curriculum）において ICT を取り入れた教育が推奨され、多民族国家という背景から、子どもを対象とした音楽学習の文献では、インクルーシブ教育の実践事例も数多く取り上げられている。

日本の教育現場においても ICT を取り入れた教育と、様々な配慮を必要とする子ども達のインクルーシブ教育の必要性が強く提唱されている。保育現場における「音楽」について考えた場合、子ども達と音楽遊びを行う保育者には創造性が不可欠であり、様々な背景を持つ子ども達をどう包括的に支援していくか、そこに ICT はどのように活用し得るのか、具体的な事例が必要となってくる。楽器は様々な子ども達と保育者の遊びの魅力的な媒体となる可能性があるが、保育者がその具体的な活動方法をイメージできない限り、現場で自由に展開することは難しい。

イギリスのナショナル・カリキュラムにおける初等教育の第一段階（KS1＝キーステージ 1）は 5 歳から 7 歳であり、日本の保育における年長クラスと年齢が重なる。従って楽器と ICT を用いたインクルーシブ教育の在り方としては、日本の保育における年長児の音楽教育の在り方としても参考になる。

本稿では、イギリスの音楽科ナショナル・カリキュラム KS1（music programmes of study）と日本の幼稚園教育要領「表現」のねらいを踏まえた上で、ドーブニー（Daubney, A. 2017）¹⁾による『初等音楽教育』（*TEACHING PRIMARY MUSIC*）第 4 章「楽器、テクノロジーとツール」から、筆者が所属する保育者養成課程の教職科目「保育内容の指導法（表現）」の授業内容としてどのように援用できるかを検討する。

II. ICT や楽器を「どのように」活用するか

1. 音楽学習に利用可能な ICT

ドーブニーは、音楽活動に用いる ICT や楽器について、「どのようなツールや楽器を使おうとも、重要なのは、何を使うかではなく、ある特定の目的のためにそれをどのようにうまく使うかである。²⁾」（p. 58.）と述べており、ICT を使うこと自体に焦点が当てられるべきでないことを忠告している。本稿では様々な ICT の活用性と可能性について列挙された中から授業で利用可能と考えられるものを表 1 に示す。

表1 利用可能なテクノロジーの機能と子どもを対象とした音楽学習に関する可能性

テクノロジー	例	活用できる機能
電子キーボード	ポータブルキーボード	幅広い楽器の音から選ぶ；コードを使ったり/あるいはリズムミッ的な伴奏を付ける；ヘッドホンを付けて聞くか、外して大きな音で聞く
MP3 音楽ファイル	iPad あるいは その他の MP3 プレーヤー オンライン/ “cloud” music libraries—You Tube、Spotify ³ あるいは Google Play	クラス全体の歌唱、リズムあるいはアンサンブル活動を支援するため、Physical MP3 プレーヤーから歌か backing tracks を再生する。 あるいは（インターネット接続を経て）包括的なコレクションから直接音楽にアクセスする
録音デバイス	タブレット、携帯電話、ポータブルデジタルビデオ、そして/あるいはオーディオレコーダー	生徒の作品のオーディオ あるいはビデオ録画と再生
ポータブルオーディオ録音	Transcam DR あるいは Roland R ポータブルレコーダー	教室あるいはその他の場所でライブステレオレコーディングを作る
ビデオレコーディング	タブレット、ビデオカメラ、Zoom、携帯電話	生徒の作品のポートフォリオを創り上げるため、進捗状況または仕上がった演奏を録画する。学校のネットワークを経て生徒あるいは保護者と共有する。
経験者向け		
スコアとノーテーションソフト	Sibelius、Finale、 MuseScore	演奏機能を伴うスコアとパート譜を作る

(Daubney, A. 2017, p.57 Table4.2 より筆者抜粋・作成)

電子キーボードに関しては、エレクトーンやクラビノーバを用いて様々な音色を選ぶことが可能であり、ロールピアノでもリズム伴奏や転調、音色の変更などが可能である。保育者養成課程ではこれらを用いて、「お話に音楽を付ける」創造的活動が可能である。

MP3 等の再生は、保育現場において保育者によるピアノ伴奏だけでなく様々な種類の音楽を流したい時、保育者も子ども達と共に身体表現活動を行うことが望ましい時、劇遊び、運動会、生活発表会等様々な場面で活用できる。保育者養成「保育内容の指導法」や「幼児と表現」等の音楽表現に関する科目においても、お話やイメージに基づいて音楽を付ける、音源からお話を創る等の活動において、楽器による伴奏を支援するツールとして活用可能である。

録音機器についても、保育現場では年長児の発表会に向けた子ども達の身体表現活用を iPad で録画し、それを子ども達自身が見て立ち位置等を確認するようなフィードバックが行われており、保育者養成においても同様に自分達の身体表現や演奏、演技の様子等を録画して省察する活動に活かすことができる。

また、Zoom で自宅や構内等様々な場所で、それぞれの演奏や表現の様子を、進捗状況として録画し、授業内でそれぞれのグループの振り返りと共に、他の学生や教員とも共有して検討することができる。

楽譜入力ソフトについては、保育現場で伴奏譜等を編曲して配る可能性があるため、保育者養成においてもグループで創った音楽を MuseScore に入力し、再生する等の経験が必要である。

2. 環境設定

ドーブニーは、「教室の理想的なレイアウトは、教師が計画した学習活動と、スペースの柔軟性によって決まる」(p. 58)と述べており、様々な支援を必要とする子ども達のグループワークを促進するため、下記のような提案をしている。

表 2. 教室や学内環境の活用

①【教室のレイアウト】
「可能であれば、椅子やテーブルを移動させて、物理的な空間をより有効に活用すべき」(p. 58)
②【床の上で輪になって活動する】
「キーステージ 1 では特に、椅子やテーブルを使わずに、 <u>クラス全員が床の上で輪になって座ったり立ったりするのが好ましいレイアウトである。教師が輪に入って座る形のレイアウトは、子ども達の注意を引きつけ、音楽的に参加することができる。エネルギーと注意を 1 つの空間に集中させ、『コミュニティ』の感覚を生み出す。この配置は、例えば歌を歌う、動作を提案して真似る、音楽ゲームをする、楽器を種類別に分類する、議論する、指示する、楽器を演奏するなど、様々なことに適している</u> 」(p. 58)
③【フロアスペースの使い方】
「フロアスペースは子ども達が動いたり、絵を描いたり、話したり、遊んだり、歌ったり、話し合っ

たり体を動かしたりするのに適した柔軟性を備えている。机の前の椅子に座っていても、物理的なスペースを柔軟に使うことでこれらのことを行うことができる。(p. 58)そして様々なスペースを利用することで、学びのダイナミックさが変わる。打楽器を演奏する場合、幼い子どもたちにとっては、テーブルなしで床の上が最も自然な演奏方法であることが多い。」(p. 59)

④【他のスペースを利用する】

学校には他にも物理的なスペースがあり、利用可能である。グラウンドなどの屋外スペースも、様々な目的で利用できる。外の環境で音を聴いたり、色々な楽器で遊んだりする。(子ども達は外でブームワッカーで遊ぶのが好きで、自分達の音楽を録音することが多い)

⑤【グループワークを促進する】

子ども達に役割と指示を与え、グループで活動するのを支援することは非常に有益である。教室には、グループでの作業を嫌がる子どもや、一緒にされた子どもと活動したくない子ども、グループに受け入れられない子どもがよくいる。子ども達がグループの中でお互いに近い距離で音楽をつくるが多いため、物理的なスペースが限界の要素となることもある。多くの子どもが周囲の騒音をシャットアウトして自分の「音の泡」の中で集中する。一方で、ある子ども達はこれが上手いいかない。

子ども達を参加させるための戦略として、廊下のスペースを利用したり、教室内の騒音レベルを下げるために全員が静かな音量で練習するよう交渉したりすることが挙げられる。子どもによっては、5分から10分程度はその場に留まるよう交渉し、短時間の休憩を取ることができるようにし、グループに戻る前に、ヘッドフォンを付けたり、別の場所に行ったりして、音楽的に建設的なことをしてからグループに戻ることができるようにする。(p. 59)

⑥【学びの場の設定：一緒に演奏する】

楽器、声、テクノロジー等、音楽をつくる方法は無限にある。子どもたちの年齢にかかわらず、既に習った歌や曲など、音楽の枠組みに沿って楽器を取り入れると効果的である。レパトリーや創造的な刺激は、子ども達が学び、成長することを望む内容にふさわしいものを選ぶことが重要である。

<幼児期の例 主な学習目標：歌のリズムを正確に演奏する>

12人のレセプションクラスの子子ども達が、シェファード先生と一緒に床に座っていた。アマデウス・ナーサリーのCDに収録されている「Pease Pudding Hot」という曲が、子ども達が部屋を出入りする度に流れていた。子ども達はその録音に合わせて歌い、先生に本物のフルートを見せてもらって、フルートの間奏部分を真似した。(シェファード先生は、子ども達の意見を聴いて、音の出し方を実演してくれた。)シェファード先生は、ルークに一对のクラベスを子ども達に渡すよう頼んだ。次の回では、子ども達は歌いながらクラベスでその曲のリズムを演奏した。その正確さにはばらつきがあったが、曲が2番に進むにつれて、おおむね上達していった。

この活動をさらに発展させるためには様々な選択肢がある。例えば、楽器を変えたり、音を大きくしたり小さくしたり、あるグループが最初のフレーズを演奏し、全員が一緒に終わってしまう前に他のグループが2番目のフレーズを演奏し、リズムの代わりにビートを演奏したり、フルートの間奏で別の打楽器で「フリースタイル」をしたり、最初の歌詞に戻った時にクラベスを演奏したり。この曲は和声的にシンプルでもあるので、チャイムバーでhome noteを演奏してみるのも良い。

我々は、音素材を自由に演奏する方法がたくさんあることを意識する必要があり、学習の目的を明確にし、それに沿った活動を行うことが主な関心事になっていることに気付く必要がある。

(p. 63)

(Daubney, A., 2017, pp. 58-63. より筆者作成)

ここでは様々な子ども達と一緒に活動する際に生じる課題も示されている。日本の保育室内においても、子ども達が自由に一斉に音を鳴らす活動では、騒音が課題となる。

床に座って輪になって行う活動については保育者養成課程では保育室のような板張りあるいはカーペットの部屋で行うことが望ましい。そこで、自らも「静かな音量」で音探しを行う、グループでの活動に制限時間を設け、個別の音楽づくりの活動と組み合わせる等、音環境や集中力に配慮した柔軟な活動形態を行うことで、子どもの立場から考えることができるようになる。

III. インクルーシブ音楽づくり (music making)

ドーブニーは、インクルーシブな音楽づくりの事例として、下記の例を挙げている。

「インクルーシブ音楽づくり」の事例

金曜日の午後、35人の生徒が大太鼓の前に置いて輪になって座っていた。学校の副校長であるティムが加わり、マスタードラマーの役割を担った。「ウォームアップ」として、手に優しく息を吹きかけてから、その太鼓の皮に指で円を描いて「風の音」を作っている。その後、雨が降り始め、太鼓の皮の上で指を動かすピタピタという音が、雨が強くなるように大きくなっていき、そしてまた再び優しくなっていく。それからの20分間、グループは一緒に音楽を作った。繰り返されるパターンを一緒に演奏したり、既に学んだコール&レスポンスのように。これは、「Ello, Ello, What's all this?」と警察官に聞かれ、それが「覆面警察」によって「Bonjour, Bonjour, C'est que ce?」と聞かれることに変化し、より静かな音量で演奏された。時にはパターンがよどみなく進んでいるときに、マスタードラマーがジャンベをより複雑なリズムパターンで即興で演奏することもある。それを真似したり、応用したりする生徒がいる一方で、他の生徒たちは知っているリズムを続ける。時には、生徒が次のパターンを選択したり、新しいパターンを提案したり、円の中央に立ったり座ったりして「魔法の魚」と呼ばれるギロを上下に動かしてアンサンブルの音量を指示することもある。アンサンブルを止めるには、マスタードラマーが片手で演奏し、もう片方の腕を空中に上げる。それを左から右に動かしながら、「1、2、3、4、ストップ。」(ストップで拳を握る)と言うと、ほぼ毎回、アンサンブルが一斉に止まる。期待値が高く、

明確に理解され、ルーティンが確立されていた。この音楽作りに参加していることの喜びが十分に伝わってきた。(p. 62.)

そしてこの事例について、下記のように解説している。

これを読んでもわからないのは、この生徒たちが全員、特別支援を必要とする状態にあり、学習困難な子どもたちのための学校であるということだ。子どもたちの多くは言葉を話さず、ほとんどが限られた言語しか話せない。また、身体的な障害を持つ生徒もあり、多くの生徒が学校生活を通じて1対1の支援を受けている。これは、ブライトンにある特別支援学校での1週間のハイライトである。

毎年この学校を訪問する際、彼らの音楽に対する熱意、献身、質の高さに圧倒される。また、子どもたちへのきめ細やかなサポートにより、子どもたちの関心を高めているスタッフの取り組みにも驚かされる。スタッフは、子どもたちが「強制」されることなく楽器を演奏できるように丁寧にサポートすることで、子どもたちの参加を促す。また、これらの若者の多くは、インクルーシブ・コミュニティーニバルバンド‘Unified Rhythm’にも参加している。リハーサルやパフォーマンスに参加しても、この複雑で難しいポリリズムな音楽を演奏している若者の中に、学習困難者がいるかどうかを判断するのは難しいだろう。これらの例は、私たちがすべての生徒に対して高い期待を持つべきであることを明確に示している。当然のことながら、教師が生徒に期待することは、教育の成果や学習者としての子ども自身の自己評価に影響を与えることを示している。(pp. 62-63 より筆者要約)

ここには、特別な支援を必要とされる子ども達の創造的な音楽表現の可能性が示されており、教師が子ども達の可能性を信じることの重要性、「子どもたちが強制されることなく楽器を演奏するように」サポートすることによって、子ども達がその表現力を発揮できることが挙げられている。

ここで重要なのは、特別な支援を必要とする子どもが、素晴らしい音楽表現をする可能性があるということであり、インクルーシブな音楽づくりを行うことによって、子ども達同士が刺激を受け合うことになる。

IV. 音楽科ナショナル・カリキュラム

イギリス（イングランド）では1992年以降、初等学校・中学校段階の音楽科ナショナル・カリキュラムが施行され、音楽は「基礎教科」に当たる。音楽科ナショナル・カリキュラムの目的は、下記のように挙げられている。

「・偉大な作曲家や音楽家の作品を含む、様々な歴史的時代、ジャンル、スタイル、伝統の音楽を演奏し、聴き、検討し、評価する。

・歌うこと、自分の声を使うこと、自分や他の人と一緒に音楽を作ったり作曲したりすること、楽器を学ぶ機会、テクノロジーを適切に使うこと、そして次のレベルの音楽に進む機会を持つこと。

- ・音楽がどのように作られ、生産され、伝達されるかを、相互に関連する次元（音程、長さ、強弱、テンポ、音色、テクスチュア、構造、適切な楽譜）を含めて理解し、探求する。⁴⁾

このように、伝統的な音楽史を批評的に聴く鑑賞と演奏、様々な音素材を用い、音楽の要素に着目した音楽づくりを行うことと共に、テクノロジーの活用が明記されている。

これらの目的の下に、「到達目標」として「各キーステージの終わりまでに、生徒は関連する学習プログラムで指定された事項、スキル、プロセスを知り、適用し、理解すること」が求められている。

本稿で挙げた事例に関連する、KS1（5－7歳）の「教科内容」は下記の通りである。

- 「・歌を歌ったり、節を付けたりリズムカルに話したりして、声を表情豊かにかつ創造的に使う。
- ・調律された、または調律されていない楽器を音楽的に演奏する。
- ・集中して理解しながら、さまざまな質の高い生演奏や録音された音楽を聴く。
- ・音楽の相互に関連する側面を利用して、音を試し、創り、選び、組み合わせる。⁵⁾

このように、基本的に創造的な音楽表現が想定されており、イギリスのペインターとアストン（1970）⁶⁾に代表されるような創造的音楽学習が源流となっている。これは現代音楽の作曲手法を用いて子どもが音素材を取捨選択し、グループで音楽づくりを行うプロジェクトである。

上記の「教科内容」に関しては日本の保育現場における年長児でも可能であると考えられる。事項で日本の幼稚園教育要領「表現」のねらいを踏まえた上で教職課程「保育内容の指導法（表現）」への応用の可能性を論じる。

V. 結論：教職課程「保育内容の指導法（表現）」への応用可能性

文部科学省（2018）による幼稚園教育要領「表現」では下記のような「ねらい」が掲げられている。

- 「（1）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
- （2）感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ
- （3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」⁷⁾

これらを踏まえ、表1・表2で取り上げた活動例から、「保育内容の指導法（表現）」での活動案として、学生自身の創造性を高め、保育現場で様々な子ども達と共に ICT や楽器を用いて音楽づくりを探索するための学びの方法として、下記の活動を提案する。

1) 「（3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」⁸⁾ための活動

各グループで「生活」に関わるテーマを決めて、太鼓だけ、タンブリンだけ、等1種類の音高のない打楽器で音楽づくりを行う。その前に準備段階として、松尾・佐藤・坪能（2007）による“音楽づくり”ワークショップ⁹⁾から「ひとつの音で音楽をつくる」活動として、「1分間のなかで、各自2～3回（ル

ールを決めて)音を出す。単音・複音・強弱など付けると、より効果的になる。音と『間』を聴く。手拍子だけでも、同一多種の打楽器でも、声でも、楽器の一言でも良い。一言で同じリズムを繰り返す、各自決めたリズム・パターンを繰り返す、そのリズムをプラス→ミニマル・ミュージックの範疇になる」(pp. 4-5)といった、一つの音を様々な奏法で吟味する経験をする。

その際の活動形態として、前述のⅡの2. 表2②【床の上で輪になって活動する】を参考に、板張りの保育室のような場所でグループごとに学生が輪になって座り、その中に教師が入ってグループを回る形で音楽づくりを行う。

また、表1にあるように、エレクトーンやクラビノーバ、ローランドピアノでリズム伴奏や転調、音色の変更などを活用し、「お話に音楽を付ける」創造的活動が可能である。

2) 音探し、サウンドスケープ

・Ⅱの2. 表2④【他のスペースを利用する】

ブームワッカーを持って中庭に出て、様々な音を探求し、それをスマホやタブレットで録音/録画し、後で発表する。どのようにしたらどのような音が出たかを検証する。合奏やコール&レスポンスなど、様々な音楽づくりに発展させる。

・Ⅱの2. 表2⑤【グループワークを促進する】

同じ教室内でなるべく静かに音楽づくりを進める。5分～10分グループで音楽づくりを進めた後、各自で練習室や違う場所に分散して音楽的に建設的なことをしてから再びグループに戻る。

「(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」

- ・グループで創った音楽を MuseScore に入力し、再生する
- ・MP3 等の音源の活用—お話やイメージに基づいて音楽を付ける、音源からお話を創る、身体表現のイメージに基づいた音楽を付ける、等の活動において、楽器による伴奏を支援する形で用いる
- ・自分達の身体表現や演奏、演技の様子等を iPad やスマホに録画し、後で再生して今後の課題を見出す。
- ・Zoom で自宅や構内等様々な場所で、それぞれの演奏や表現の様子を進捗状況として録画し、授業内でそれぞれのグループの振り返りと共に、他の学生や教員とも共有して検討する。

これらの活動は、学習支援ツール manaba との連携によってより効果的に展開できる可能性があり、遠隔授業となった際の選択肢もより幅広く、深い学習が可能となるだろう。

<註及び参考文献>

¹ Daubney,A. (2017) *TEACHING PRYMARY MUSIC*, SAGE.

² 同上

³ 数千万の楽曲を再生できるオーディオストリーミングプラットフォーム

⁴ <https://www.gov.uk/government/publications/national-curriculum-in-england-music-programmes-of-study>

(2021 年 3 月 26 日更新、2021 年 11 月 27 日アクセス)

⁵ 同上

⁶ Paynter, J. and Aston. P. , (1970) *Sound and Silence-Classroom Projects in Creative Music* (邦訳 (1982) 『音楽の語るもの』 音楽之友社)

⁷ 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』

⁸ 文部科学省、同上

⁹ 松尾祐孝・佐藤昌弘・坪能克彦 (2007) 『“音楽づくり” 音楽づくりワークショップを楽しむために』 マザーアース.